

【佳作】

## 御茶ノ水、1980年代の幽霊

人間科学部 人間科学科3年 堀口大地

きつかけは、合同サークルの打ち上げでした。季節は初夏。日中は夏のように暑くて、夜になると少しだけ風が冷たくなる頃です。

服装の選択を、毎日一度は後悔するような、そんな時期でした。

「誰かと仲良くなれるかもしれない」

打ち上げに参加した動機を言葉にするなら、きつとそれが一番近いと思います。でもそれは、どこかで「そうならたらしいな」という、諦めが半分混ざった願望でもありました。

飲み会の席って、不思議ですよ。笑っている人の顔ばかりが目に入ってきて、自分だけがそこうまく馴染めていないような気がしてくる。僕は昔から、愛想笑いがどうしても苦手でした。誰かが冗談を言って、周りが笑っている場面で「今笑わなきゃいけない」という空気はちゃんと伝わってくるのに、素直に笑顔になることがどうしてもできないんです。話題に乗っかることもできないわけじゃない。でもそういう自分が嘘をついているように感じてしまっただけ、それがすごく居心地が悪くて。だから結局、誰かと話していても、どこかで自分が部外者みたいな気分になってしま

います。

まわりには自然にできた小さなグループがいくつもできていて、それぞれのテーブルで盛り上がっている輪の中に、僕の居場所はありませんでした。名前を交換しても、印象までは交換できない。言葉のやりとりはしていますが、記憶にはまるで残らない。

何を話しても、自分がそこに存在している実感が持てませんでした。笑い声があちこちで響いていて、それなのに、その中で自分の声だけが別の空間にいるような気がしてきて。そのうちに、周りの人と比べて上手くできない自分はどこか人として欠けているんじゃないか、そんなふうに思いはじめていました。だから、二次会のカラオケにも流れでついていったのは、一人で帰る決断をするのが悔しかっただけだと思います。

二次会のカラオケに金髪の女の子がいました。明るくて、人当たりもよくて、誰とでも自然に笑いながら話していて。それでもなぜか、その表情の奥に、少しだけ遠くを見るような目がありました。僕とは一言も話さなかったのに、不思議と、

目を惹かれました。彼女の存在だけが、部屋の中で異質に見えたのです。場に溶け込んでいるようで、どこか「そこにはいない」ような、不思議な違和感をまとっていました。

カラオケが終わって、始発まで時間を潰すことになったとき、何人かと一緒に御茶ノ水の坂を歩きました。

深夜三時過ぎ。昼間のざわめきはすっかり消えて、坂道はまるで時間ごと静止した映画のセットみたいでした。白い街灯が、アスファルトにうすく輪を落として、遠くでは工事の重機が眠たそうに唸っていました。

あの女の子のことが気になって、何人かにどの大学か尋ねてみたんです。でも誰も知らないと言いました。「さつき自己紹介してなかった？」なんて声もありましたけど、結局誰一人として確かなことを言える人はいませんでした。

ふと気がつくとき、僕は彼女と並んで歩いていました。他の人たちは、いつの間にか少し後ろで笑い声を上げていて、僕たちは自然と、二人だけに

なっていました。

「眠くないの？」

僕からその声をかけました。ただの興味本位です。彼女はすこしだけ顔をこちらに向けて、ふつと笑いました。笑顔の中に、どこか古い光を含んでいるような気がしました。

「このあたり、夜の方が好きなんだよね。」

彼女はそう言って、坂の先に見える神田川のほうを眺めました。

「昼間はビルも人もぎゅうぎゅうで、なんか落ち着かない。でも夜になると、ちょっと昔に戻ったみたいになるんだ。」

「昔って、どのくらい？」

「うーん……1980年とか、そのへん。」

「ずいぶんピンポイントだね。」

「1980年代の御茶ノ水が、一番好き。っていうか、その頃からずっと、ここにいるんだよね。」  
 近くの植え込みから、猫が一匹、がさがさと音を立てて抜けていきました。

「……どういう意味？」

「そのまんまだよ。」

彼女は振り向いて、いたずらっぽく微笑みました。

「私、たぶん幽霊なの。」

そして、何事もなかったかのように、また坂を歩きはじめました。明らかに変なことを言っています。目の前で一緒に歩いているのは金髪の人間でした。ただ、彼女からのただならぬ雰囲気というか、何故か嘘をついているように思えなかったのです。ここで怯むとつまらない、大したことのない人間だと思われそうで、とりあえずの間をもたせるような質問をしました。

「幽霊って、自覚あるの？」

「うん。はつきりとはないけど……気づいたときは、ここにいたんだ。たぶん、ずっと昔から。」

「どのくらい昔？」

「百年くらいかな。まあ正確な年数は覚えてないや。時計とか興味ないから。」

そう言って、彼女は石畳の縁をバランスを取るように歩きました。

「昔の御茶ノ水は知ってるよ。戦後すぐのときも、昭和四十年代のときも、バブルのときも。いろんな顔を見てきた。いちばん好きなのは1980年

代。あのころの建物って、無理があつて、夢があつて、妙に人間くさくて好きなんだよね。」

「今は、どこに住んでるの？」

「うーん、いろいろ。文化遺産とか、もう使われてない旧館とか。だいたい夜に忍び込んで寝てる。」

「忍び込むって……鍵とかは？」

「幽霊だから、通り抜けられるんだよね。」

その言い方があまりにも自然で、どこまでが冗談なのか判断できませんでした。

「一番のお気に入りだね、地下にある遊園地。」

「地下？ 御茶ノ水に？」

あまりにも突拍子のない話です。しかし、すまし顔の彼女をみていると、何故だか当たり前の話として受け入れながら聞いてしまつたのです。

「うん。昔あつたの。デパートの下に入つた。もうとつくに閉鎖されてるけど、誰も来ないし、すごく静か。落ち着くんだよ。」

僕はその言葉を聞いて、少し都市伝説みたいなな、と思いました。御茶ノ水の地下に遊園地があつたなんて、聞いたこともなかったからです。

「そういう誰も来なくなった場所とか、忘れられ

たものって、時間が止まってる。落ち着くんだよね、そういうのって。」

彼女はそうつぶやいて、しばらく黙っていました。やがて空がうっすらと青くなってきた、街灯の光と混ざるように、夜が少しずつ溶けはじめました。坂を下りきるころには、始発が動き出していました。なんとなくの流れで、彼女と二人で駅へ向かい、電車に乗りました。

車内はまばらで、まだ眠たそうな人たちが、ぼんやりと窓の外を眺めていました。車窓に、見慣れない奇妙なビルが映りました。茶色い、時代に取り残されたような高層マンション。ドーナツ状に部屋が並び、中央には複数のエレベーターが並んでいました。

「あの建物、好きなんだ。」  
彼女が指を刺して言いました。

「バブルの頃に建てられたの。無理な設計で、今なら許可降らないと思うけど、ああいうのが愛おしいって感じる。」

「今も人、住んでるの？」

「住んでる。まだ普通に機能してるよ。……でも、たぶん、いつか崩れちゃう。」

「地震とかきたら、真っ先に倒れそうだね。」  
そう言うと、彼女は少し笑って、ゆっくりと頷きました。

「だからいいんだよ。限界ぎりぎりで存在してるものって、昨日も今日も少しずつ朽ちながらそこに立ってるの。そこにはね、建物が建てられた時代の人間の夢か思いとか営みとか、その残骸をずっと持つてるの。」

電車がぐらりと揺れて、天井の蛍光灯が一瞬、反射しました。

外の光と車内の照明が混ざって、街の風景が少しだけ夢の中のように見えました。

やがて、僕の大学のキャンパスが見えてきました。

「あそこにもあるよ。」  
と、彼女が言いました。

「あそこの地下に、小さい展示室があつてね。御茶ノ水の昔の建物とか、写真とか、模型とかが置いてあるの。」

「知ってる。数年前に教授に案内されて入ったことあるよ。」

そう言った瞬間、彼女の目がぱつと輝きました。子どものように頷きながら、「ほんとに？」と嬉しそうに聞き返してきました。そのときの目がと

ても綺麗だったのを、今でも覚えています。その目を見ていると、明るくてどこかノスタルジーなその子と特別な関係になりたいと思ってしまう。百年間生きている亡霊のその子の特別になれたら、何でもない自分にも価値ができるんじゃないかって。そんな邪な僕を横目に、彼女はほんとうに楽しそうに話し続けるんです。

「あそこ、公開されてないから、普通は入れないし、知られてないんだよ。私もあそこ好きなんだよ。誰もいないし、少しだけ昔に戻れる気がする。」

彼女は窓の外をじつと見つめました。電車が御茶ノ水を離れていく間、彼女の視線は、まるで街の一部を見送っているようでした。電車が駅を通り過ぎていくあいだ、彼女の横顔はとても穏やかで、けれどその視線の先には、ただの建物以上のものが映っているように感じました。

ひび割れた壁や、錆びついた扉、色褪せた掲示板。そんなものたちに囲まれて、時間の層の中に立ち尽くす誰かの姿が、確かにそこにあるような気がしました。

「最近ね。」

と、彼女がぼつりとつぶやきました。

「御茶ノ水の古い建物が、どんどん壊されてるんだよ。文化遺産とか、昔のアパートとか。少しずつ、全部なくなってる。」

「うん……そうかもね。」

「きつと、そのうち全部新しいビルになって、昔の面影なんて、どこにもなくなっちゃうんだと思う。」

「……それって、寂しい？」

僕が聞くと、彼女は何気ない言葉に対して、遠くをみてよく考えているようでした。そして、ぽつりと言いました。

「うん。寂しい。……というか、たぶん私、それと一緒に消えちゃう気がするんだよね。」

「え？」

「全部なくなったら、私にも存在する理由がなくなる気がする。確信はないけど、なんとなくそう思うの。私はこの街が好きだから、この街がこの街でなくなったら、私がここに在る意味もなくなっちゃう気がするの。」

言葉としては静かだったけれど、それはまるで何年も前から心の底にあった不安をそっとすくいあげるような声でした。

しばらく黙っていたけれど、僕は少し迷ってかと言いました。

「……じゃあさ。」

僕は少し声を低くしました。

「僕と一緒にいない？ ずっとさ。」

咄嗟に思った言葉を思わず口に出してしまいました。普段なら口の中に残す言葉を、喋ってしまったという気分になってしまったのかもしれない。なんにせよ、普段の自分からは考えられない行動でした。

彼女はすぐには返事をしませんでした。それどころか、果たして僕の言葉を聞いていたのかもわからない反応でした。でも一駅分の沈黙のあと、ふつと意地の悪そうに微笑んで言いました。

「……ずっと一緒にいてもいいよ。私があなたに飽きない限りはね。」

「じゃあ、飽きさせないようにするよ。」  
彼女は納得したように小さく笑って、窓のほうを見ました。

次に気づいたとき、僕は自分のベッドの上にいました。カーテンの隙間から、昼に近い光が差し込んでいて、まぶしさよりも先に、妙な静けさだけが身体に染みこんできました。頭はぼんやりしていて、時間の感覚がうまく戻ってこないまま、スマホを手にとると、充電のコードが床に落ちていることに気づきました。時刻は10時過ぎ。飲み会の翌日としては、きつと普通の時間帯です。夢だったのかもしれない、と思いました。でも、それにしても細部まで鮮明で、思い返すたびに、ほんの少し胸が締めつけられるような感覚がありました。もう一度寝返りを打って、天井をぼんやり

と見上げました。

「飽きない限りは、ずっと一緒にいてもいい」

彼女の言葉が、どこか遠くから、微かに響いてくるような気がしました。それから数日後、僕は久しぶりに御茶ノ水を訪れました。通い慣れていたはずの坂道は、どこか雰囲気が変わっていました。新しいビルがいくつか増えていて、昔あったはずの古い建物のいくつかはもう姿を消していました。それでも、あの茶色い違法建築のマンションは、まだそこにありました。

ドーナツ状の中庭と、複数のエレベーターが交差する無理のある構造。中央の吹き抜けには、埃をかぶった自転車と植木鉢が転がっていました。外階段を、誰かが上がっていくのが見えました。それが誰かは、見えませんでした。でも、もしこの街のどこかにまだ彼女がいるとしたら、きつとこういう場所にいるんだろうな、と思いました。僕は立ち止まって、しばらくそのビルを見つめていました。どこにもいない、でもどこかにいる。そんな存在が、この街には本当にいるのかもしれない。そう思えるくらいには、あの夜のこととは鮮明でした。

## コメント

今年の夏のある日、僕は夢を見ました。夢だったので起きたときにはほとんど覚えていません。かろうじて「御茶ノ水」「真夜中の遊園地」「違法建築のマンション」「金髪の女の子」という微かな映像だけが残っていました。しかし、夢の中で味わった様々な感情は大きな存在感を鮮明に僕に残しました。劣等感、夜の匂い、朝の匂い、憧れ、遊園地という存在の非日常感、人の日常の営みに対する慈しみ、想像力を掻き立てられるクーロン城のようなマンションなど…。僕は趣味で時々、小説を書きます。小説を書くときはいつも、先行して感情があります。自分のありふれた感情だったり、誰かに伝えてみたい感情です。今回は夢で味わったままの僕の感情を読んでもらう人に追体験してほしいという想いがあります。読了後、僕が味わったままの感情が届かなくても、その人に何かしらの感情が生まれたのなら本望です。